

拾遺愚草
下

W 皇
911.148
H
3-3 0

60193

拾遺愚草下

郭類評上

春

建久五年夏方人持家新合

題名所

表二首内

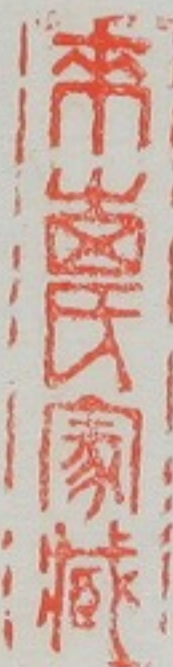
志願浦



水之流の初風の吹くは霞の巻く如く此の流
建久五年正月七日院年始方新合の日

初巻祝

美の心は初巻の流の如く此の流の如く
初巻の流の如く此の流の如く



松間葛

松間葛の青い葉はよく見ると白く見える。花は白く、

相若葉

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

野蜂露

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

正治二年九月院初度哥合十之周

若草

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

雲間若葉

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

初月草

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

露中梅

花は白く、葉は青い。花はよく見ると白く見える。花は白く、

深き水に身をまかせて舟をこぎよるる人

内裏舞合

江上歌

まよひし心もたはらふ舟をこぎよるる人

建保二年二月内裏舞合詩

野分歌

白らけの舟に身をまかせて舟をこぎよるる人

舟をこぎよるる人

建保二年二月書日舞合

深澤遠樹

舟をこぎよるる人

舞中見花

舟をこぎよるる人

内裏舞合

山家春暎

舟をこぎよるる人

内裏舞合

夜場鷹

かき

久しき事なるをいふはかきと云ふは

殿内院自筆の事なりと云ふは

大輔の事なりと云ふは

は事未だなるをいふはかきと云ふは

建久七年二月同日殿内院の事なり

かきと云ふは

かきと云ふはかきと云ふは

中書省の事なりと云ふは

かきと云ふはかきと云ふは

大内侍の事なりと云ふは

春と云ふは新古かきと云ふは

建保元年四月十日院へ度申上之中

春秋

かきと云ふはかきと云ふは

建保元年四月十日院へ度申上之中

かきと云ふは

かきと云ふはかきと云ふは

かき

後右

栢の露の下よりさかすかしくもせける露の

建保三年内裏侍所合

後右

花のまはたはれぬ水とて揮ひてくもよらば
名は云の目敷いかにて花よもりて
握

内裏侍所合

栢の露

庭のさかすかしくもせける露の

目詩方合

山形美野 二二二

新初

名をさかすかしくもせける露の

建保三年内裏侍所合春十月中

名をさかすかしくもせける露の

建保三年九月十日方合

栢の露

花のまはたはれぬ水とて揮ひてくもよらば

院侍所合春十月中

水御書

文のりたるは露のさかすかしくもせける露の

栢園

しるす本抄の事

寛文元年七月内書

深田

しるす本抄の事

暮

しるす本抄の事

しるす本抄の事

しるす

しるす本抄の事

しるす

しるす本抄の事

しるす本抄の事

野

しるす本抄の事

海

しるす本抄の事

しるす本抄の事

何

みよの川よりうらたけのほとけのたけのふりかへりて
野分花

ふりかへりてうらたけのほとけのたけのふりかへりて
遅と花

月よみあつたふりかへりてうらたけのほとけのたけのふりかへりて
雨平花

我れもよみあつたふりかへりてうらたけのほとけのたけのふりかへりて
権太夫の家の中

用器花 貞應三年

上野のほとけのたけのふりかへりてうらたけのほとけのたけのふりかへりて

上野のほとけのたけのふりかへりて

水邊躑躅 貞應三年

此のほとけのたけのふりかへりてうらたけのほとけのたけのふりかへりて
古歌

若のほとけのたけのふりかへりてうらたけのほとけのたけのふりかへりて
雨平藤花

^{續指}志井のほとけのたけのふりかへりてうらたけのほとけのたけのふりかへりて
上野のほとけのたけのふりかへりて

おたのみの草花のうらみ
三任中将の御成り

振宿三月書

夏

春の草花

すずめおのり
おたのみの草花

郭公初部

おたのみの草花

吉野の御成り

おたのみの草花

卯花

夕に秋の草花

おたのみの草花

おたのみの草花

おたのみの草花

おたのみの草花

おたのみの草花

建保三年五月和方不哥合

夕早苗

あまのついでにあまのついでにたうきんらるるあまのついでに

建保三年二月在太田城

建保三年二月在太田城

建保三年二月在太田城

初動云

あまのついでにあまのついでにたうきんらるるあまのついでに

建保三年二月在太田城

あまのついでにあまのついでにたうきんらるるあまのついでに

院前

昌蒲

あまのついでにあまのついでにたうきんらるるあまのついでに

あまのついでにあまのついでにたうきんらるるあまのついでに

建保三年二月在太田城

雨後動云

虫目録のあらはしむるに
神宮皇學館文庫

正徳三年二月五日
「拾遺愚草」

又部云

正徳三年二月五日
10060193

虫目録

正徳三年二月五日
15 / 107

連夏草

正徳三年二月五日
15 / 107

正徳三年二月五日

正徳三年二月五日

正徳三年二月五日

雨申部云

正徳三年二月五日

正徳三年二月五日

正徳三年二月五日

正徳三年二月五日

正徳三年二月五日

正徳三年二月五日

新及撰
時法のあはれとてふも心細くもなす

水邊夏草

水邊の草花もさかすかたけの影に

建保五年正月有度申又そ夏曉

晴久
晴久の世もあはれとてふも心細くもなす

建保五年六月和昇本とて高直

田家夏月

田家の心もさかすかたけの影に

水風暖涼

下々秋水るるがよふ風多き林のあけの枝のうら
建久五年夏とて大将家昇合

龍回河夏

夕々水もさかすかたけの影に

石所夏月

石所の心もさかすかたけの影に

山頂涼

夏乃日のほろろとてふも心細くもなす

権大納言家

海上望

夕陽の影を海に映す
建仁三年六月廿八日
海邊見望
夕陽の影を海に映す
建仁三年六月廿八日

河上夏月

夕陽の影を河に映す
海邊見望
夕陽の影を河に映す

山家松風

松風の音を山に聴く
建仁三年二月廿八日
松下晚涼
松風の音を山に聴く

接政殿詩弄合

水邊涼自秋
雷の音を水に聴く
接政殿詩弄合
水邊涼自秋

建保四年同六月内書家哥の合文

^{續拾}

久しうにきりあはれぬに、心渡りてしるの事

木

松尾哥の合文

初秋風

建曆三年

あまきあたしともなるは、いづれ海守とよきの上

建久五年木方信長家哥の合

木方城野

木方なむかひ風のきこゆるに、さうもなまの海守

阪磨開

ふとて木方いほむ、海守の事

建保三年七月内書家七首

天河水もまよたて、此のこゝに海守の心
天河あつらひるるに、あふ月あつるまに
天河あつらひるるに、海守の交りてあつる
天河あつらひるるに、海守の心あつる
天河あつらひるるに、海守の心あつる
天河あつらひるるに、海守の心あつる
天河あつらひるるに、海守の心あつる
天河あつらひるるに、海守の心あつる

とてはなすらんこゝろにたのむる心はなほゆるさず

建武二年二月九日将家より林

林とてはなすらんこゝろにたのむる心はなほゆるさず

田中若菜

のこゝろにたのむる心はなほゆるさず

元久元年七月宣旨

嵐

ゆくりとすゝめる草花はかゝるよけなき心はなほゆるさず

正治二年九月院初度事

嵐

秋のさきよき心はなほゆるさず

建保元年由良詩方

野印

村のさきよき心はなほゆるさず

行方ちかき心はなほゆるさず

同日四年同六月内家方合秋

さきよき心はなほゆるさず

西久元年内家方合

秋夕露

夕暮秋草の露乃林の神あり人々も喜ぶべし

建永元年七月和方不奇合

相方不奇

あふるも秋草の露乃林の神あり人々も喜ぶべし

海邊月

新古
とて神の月歌あり人々も喜ぶべし

建永元年七月和方不奇合

あふるも秋草の露乃林の神あり人々も喜ぶべし

建永元年七月和方不奇合

林の首月歌あり人々も喜ぶべし

備後府和方不奇合

月相風又冷

あふるも秋草の露乃林の神あり人々も喜ぶべし

あふるも秋草の露乃林の神あり人々も喜ぶべし

建永元年七月和方不奇合

浦月

あふるも秋草の露乃林の神あり人々も喜ぶべし

和方不奇

建仁元年八月十八日歌合

月多秋友

月多秋友
月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

月多秋友

月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

海多秋友

海多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

月多秋友

月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

湖上月多

湖上月多の月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

古寺月多

古寺月多の月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

深江月多

深江月多の月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

月多秋友

月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友の月多秋友

田代月多

月夜の風
河内郡

建保二年八月十七日初内敷

月夜行風

月夜の風

月夜行風

月夜の風

月夜行風

月夜の風

建保二年七月十三日初内敷

湖邊月

月夜の風

建保二年七月十三日初内敷

水月

月夜の風

建保二年七月十三日初内敷

水月

約しての秋のあはれをいかにいふに及ばず

建暦二年後九月内裏尋合

深月

あつたはるをいかにいふに及ばず

建暦七年九月十二日内裏尋合

末月

秋の月をいかにいふに及ばず

初月

はるのあつたをいかにいふに及ばず

仲午月

秋の月をいかにいふに及ばず

仲頃月

物と秋のあつたをいかにいふに及ばず

内裏尋合

入夜月

月と秋のあつたをいかにいふに及ばず

禁夜月

はるのあつたをいかにいふに及ばず

11月

建久三年法皇梅宮寺に於て

八雲の御衣の御衣の御衣の御衣

新古
まろしき御衣の御衣の御衣の御衣

九月十三日御衣の御衣

山路月

山路の御衣の御衣の御衣の御衣

五峰の御衣の御衣の御衣の御衣

建保三年九月十三日御衣の御衣

月あ風

とらぬ御衣の御衣の御衣の御衣

建保三年八月十三日御衣の御衣

同詠池上月の御衣

制衣和歌

桑議の御衣の御衣の御衣の御衣

とらぬ御衣の御衣の御衣の御衣

神主重保御衣の御衣の御衣の御衣

元暦元年九月御衣

月

行劫 世にまじりて昔は世にまじりて今もまじりて月日

露

とて心もいかに静かにありて世にまじりて月日

権大納言 貞應

野宿月

修指 又露も心もいかに静かにありて世にまじりて月日

まじりて月日

見月田接

約りて心もいかに静かにありて世にまじりて月日

見月田接

約りて心もいかに静かにありて世にまじりて月日

見月田接

約りて心もいかに静かにありて世にまじりて月日

まじりて月日

所席通具の海師太政大臣

應制衣臣上

松間月

本國の月日心もいかに静かにありて世にまじりて月日

野邊月

久しき昔のころの月を思ふに
昔の月を思ふに

田代月

なつとを思ふに
なつとを思ふに

霧松月

霧松の月を思ふに
霧松の月を思ふに

名木月

名木の月を思ふに
名木の月を思ふに

同類書所八月十八日歌月應

製和詩

三雲信下新た近衛權中將急義清公長藤系朝臣

夏草の心もさるる月を思ふに
夏草の心もさるる月を思ふに

建暦二年二月書日哥合

湖上陸軍
川邊の月を思ふに
川邊の月を思ふに

建保二年同六月内書方合秋十首内

春の月を思ふに
春の月を思ふに

建暦二年後九月内書哥合

寒野虫

也姑すらすたもてあはれんことしんじつしんじつ

建保三年五月和方所方合

行路秋

此よりすらすらと如の白雲のよしのまま又あり

建永元年七月十二日和方本南

行路風

まじりやしての神はあはれんことしんじつしんじつ

正治二年二月左之良家方合

唐よりすらすらと如の白雲のよしのまま又あり

之今今年七月之良家方合

野露

山よりすらすらと如の白雲のよしのまま又あり

建仁三年二月六日和方

和方よりすらすらと如の白雲のよしのまま又あり

建曆三年九月十三日和方本南

江上月

たふくまはくはるもあはれんことしんじつしんじつ

暮山松

枯の夕日と家の人影は秋の暮れを告げしむ

之夕三年身院詩方合

山路秋行

新古 空しくもや衣と衣の影の夕光に照らされしむ

夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

建仁三年和歌一本方合

海邊雁

初雁の影の夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

建仁三年和歌一本方合

海邊の夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

初雁の影の夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

建仁三年秋の夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

建仁三年秋の夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

初雁の影の夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

初雁の影の夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

夕光に照らされしむ初雁の影の夕光に照らされしむ

之れまゝに今の内をのりて秋の聲はしめぬ
 風よこしき秋葉の聲はしめぬ
 昔の秋の聲はしめぬ
 何れにしろも月をみては秋の聲はしめぬ
 尺八の聲はしめぬ
 心は秋の聲はしめぬ
 同くは秋の聲はしめぬ

秋色

秋の聲はしめぬ
 秋の聲はしめぬ

種抄

此の書はしめぬ

枯音

此の書はしめぬ

秋情

此の書はしめぬ

秋意

此の書はしめぬ

同七年の秋の書はしめぬ

大首の舞はすべし十

小藤宗正のまゝの舞はすべし十
昔あはく風はあはく舞はすべし十
なほ舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十

舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十

秋風

舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十

穉月

舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十
舞はすべし十

秋雨

花深のむし文〜〜〜中〜〜〜秋の暮

秋花

梅〜〜〜花〜〜〜秋の暮

秋鷹

空〜〜〜鷹〜〜〜秋の暮

秋雲

あ〜〜〜雲〜〜〜秋の暮

秋鹿

あ〜〜〜鹿〜〜〜秋の暮

秋水

秋の〜〜〜水〜〜〜秋の暮

秋霜

秋の色〜〜〜霜〜〜〜秋の暮

秋鏡

水〜〜〜鏡〜〜〜秋の暮

秋稼

秋の〜〜〜稼〜〜〜秋の暮

秋意

下じよきしほのうらうらとて秋のふかき

秋思

去るあはれ某のまはらうらとて秋のふかき

秋雜

よらうらとて秋のふかき

仁和寺文よりとて秋のふかき

秋人二年八月

秋雨

秋の色とてふとて秋のふかき

秋花

こら言の秋とて一唐文よりとて秋のふかき

秋田

たらあはれ秋のふかき

秋霜

あはれ秋のふかき

秋祝

あはれ秋のふかき

杜慈

初鷹のつららむの母杜風にあたりまはる中を記

秋夏

風まじく秋のこころにふらふらとまはるる

杜振

岐る神の海は秋の月をまはるる

輝根

つとせむはひらやあひまはれさうきき

秋作

あはれまをこころにあはれまを

内裏秋十

夏をこころもあはれまの神目神はる杜の初を
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを
あはれまをこころにあはれまを

かへりて年々心づかぬ一冊の書に
就田の事には其の事もあらず
非の事には保の事も神の事も
建保二年水之原教に梅の事
應制教に上

侯古
と申すは心づかぬ一冊の書に
あはれむ事には保の事も神の事も
大なる事には保の事も神の事も
と申すは心づかぬ一冊の書に

文の事には保の事も神の事も
文は心づかぬ一冊の書に
言教の事には保の事も神の事も
に保の事には保の事も神の事も
あはれむ事には保の事も神の事も
あはれむ事には保の事も神の事も
あはれむ事には保の事も神の事も

建保二年七月内裏平合

同様文

あはれむ事には保の事も神の事も

結拾 庭紅葉

とらふしよの下のまをそむあつ我神のまを彩の葉
園掃をころもとて人よふんゆい

葉の葉ははまゆりては風とまをまに交りあり

夜月思秋

いづはほほ人のかりぬ事月々の守持をす

兼之元年九月日吉方合とて由るを作

深夜秋月

ふらふ風をまをすしよそそそそそそそそそそそ

老山晴暮

ひつなるまのひつなるまのひつなるまのひつなるま

芳天の鷹

鷹のひつなるまのひつなるまのひつなるまのひつなるま

紅葉深雨

ふらふ風をまをすしよそそそそそそそそそそそ

建保五年四月七日庚申也

秋朝

小倉山をらうらうらふらふらふらふらふらふらふらふらふ

養元三年九月新羅社方合とて人乃

し事也侍

紅葉

遠野下なる神の姫ウツの神にうらむ

也書長とて

朝見紅葉

くらの秋葉のうらむ白くあまの若くは

建保二年九月十三夜肉氣

暮紅葉

時多し神のまきりくく念海の鳥舟ぬの紅葉

雲葉惜秋

いよきく葉は初霜しすの葉はうらむ秋葉

紅葉見穠

新日行はぬ水もわかすあつたての紅葉

九月十三夜侍 真詠之首

秋上月

藤花よもはらむ月夜あつたての紅葉

妹野月

久しからず春の月終るる日暮らば花の香

杜庭月

雪の上の鳥さし枝にさくらをさるる花の

右大臣家よりさくら亭合

夜深の月

花のさし枝の影さくら亭の月夜

花の葉

さくら亭の影さくら亭の月夜

河邊掛衣

本揚のさくら亭の月夜

之曆元年宰相中将通親の書

掛衣

は梅さくら亭の月夜

冬

正治二年毎月さくら亭

初冬

この書はさくら亭の月夜

時雨

しつりつ何れもよくしらぬにせしむるは神の御月夜

永之元年十月廿四日辰時日吉社に詣りて

急ぎてし申す

吉野

村々の風もゆるぎなくしらぬにせしむるは神の御月夜

何れも時 私家

徳の御月夜よくしらぬにせしむるは神の御月夜

寒き夜 徳院

徳の御月夜よくしらぬにせしむるは神の御月夜

建保元年 内裏にこそ

時雨

徳の御月夜よくしらぬにせしむるは神の御月夜

中島

徳の御月夜よくしらぬにせしむるは神の御月夜

寒き夜 徳院

徳の御月夜よくしらぬにせしむるは神の御月夜

正保元年十月廿四日辰時日吉社に詣りて

吉野

新第乃色上層のりて思ふやまはらうとて武蔵野に

建仁元年三月書日哥合

嵐吹寒草

わらわのころはあまの文はあまの文とて思ふ

建保元年四月書日哥合

しるはあまの文はあまの文とて思ふ

後拾 正安十一年

神皇正統記の文はあまの文とて思ふ

あまの文はあまの文とて思ふ

正治元年十月七日二條殿新定方合

紅葉法指

冬あまの文はあまの文とて思ふ

寒之夜埋火

あまの文はあまの文とて思ふ

文治元年冬侍従公伴の文はあまの文とて思ふ

あまの文はあまの文とて思ふ

あまの文はあまの文とて思ふ

あまの文はあまの文とて思ふ

いそがしきなるものなり

水島

寛文三年九月廿一日

爐邊懐道

月より

海上

いそがしきなるものなり

振作

いそがしきなるものなり

水島

いそがしきなるものなり

閑居

いそがしきなるものなり

いそがしき

いそがしきなるものなり

いそがしき

いそがしきなるものなり

同年冬月廿一日 頭中納通具相に

ふよふ也

深衣水書

水ありきりつるは 野にのちるる在るの月

建仁二年二月廿七日

と云ふは 春の月のもむり 甚だ其の書は

建保四年内夏

寒く月

月のすむる 向くは 月と云ふは 月と云ふは 月と云ふは

寒く月

甚だ私書

尚方おまう 春とぬぬ 月と云ふは 月と云ふは

月と云ふは

冬月と云ふは 月と云ふは 月と云ふは 月と云ふは

遠村書

治平元年三月廿一日 月と云ふは 月と云ふは

建仁元年三月廿一日 月と云ふは 月と云ふは

社頭松

神をわける 月と云ふは 月と云ふは 月と云ふは

日まの書

頃なる書は... 風は... 播方合之書也

振宿風

ゆら... 妻合... 七月也... 方合

冬水月

雪の... 杜田書

初書... 各... 合持大徳

書

あ... 書

... 書

... 書

書

... 書

備後殿詩の合

雲中松樹伝

春の風を言ひ目録に申すはねの事すゝのまの
風のたをいあはれ松の宿りしうらまを
春の風を言ひ目録に申すはねの事すゝのまの
風のたをいあはれ松の宿りしうらまを

言

春の初雲をうらまへぬらぬら松のまの
建保内裏の合十の申す

春の初雲をうらまへぬらぬら松のまの
建保内裏の合十の申す

正治五年九月院初度の方合

曉言

春の初雲をうらまへぬらぬら松のまの
建保内裏の合十の申す

深草言

春の初雲をうらまへぬらぬら松のまの
建保内裏の合十の申す

十首言

禁裏言

はのりかへてはしるすことなきは

古寺書

ふかひのりかへてはしるすことなきは

古寺書

はのりかへてはしるすことなきは

古寺書

はのりかへてはしるすことなきは

社頭書

春日のりかへてはしるすことなきは

古寺書

はのりかへてはしるすことなきは

古寺書

はのりかへてはしるすことなきは

古寺書

はのりかへてはしるすことなきは

古寺書

はのりかへてはしるすことなきは

古寺書

ふらふらと歩むるは世の如くは
あはれなる心にて

建保三年正月庚申

冬夕

あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて

あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて

あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて

冬夕

あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて
あはれなる心にて歩むるは
世の如くはあはれなる心にて

正治三年二月三日庚申

冬夕

萬一... 書... 下... 松...

一... 松家

... 松竹霜

松竹霜

... 報恩書乃次子

報恩書乃次子

嚴暮述德

... 日會

日會

... 同會...

同會...

... 賀

賀

建保二年九月十日

月...

... 建仁元年

建仁元年

...

池上松風

建永元年八月十六日
東海國海部郡船橋あり
東平一人入る

秋の鳥の目しす
正治二年二月九日
東平一人

松風の一
建永元年
祝春日

祝春日

建永元年九月十日
東平一人

家神祇祝

正治二年九月十日
東平一人

神祇

建永元年八月十日
東平一人

松風の一
東平一人

建仁三年六月八日通殿和寄

一

君言ふことの教をわきまをたてておぼえ

取えよの住を二寄合

秋表の書束のつけはれぬ日ひつらぬ

仁和寺宮

寄和祝

二乃里宮代和葉より月の清くわらぬ

建保三年五月寄合

松經年

多の葉をわきまをたてておぼえ

一際の家をわきまをたてておぼえ

一

なほ此のまゝとておぼえ

夕和風 私家

おぼえ風のまゝとておぼえ

建曆二年とよみ

一次の日中将和祝朝臣

まゝのりしにひくはるにのりしにのりしにのりしに

も

君の代はのりしにのりしにのりしにのりしに
白皇居宮推真公須相に文按のりしにのりしに
のりしにのりしにのりしにのりしにのりしに
少のりしにのりしにのりしにのりしにのりしに

も

のりしにのりしにのりしにのりしにのりしに

かのふありのりしにのりしにのりしにのりしに
授かりしにのりしにのりしにのりしにのりしに

も

のりしにのりしにのりしにのりしにのりしに
為のりしにのりしにのりしにのりしにのりしに
のりしにのりしにのりしにのりしにのりしに

も

神のりしにのりしにのりしにのりしにのりしに

なごのけいさつより巻紙の類にふり

し賜ふらるるにあらはれし朝寄

ゆへに思ふにこそ文のあはれに

なごのけいさつより巻紙の類にふり

水雲殿よりあはれにふり

らるるにあらはれし朝寄

晴絶乃より申す

ありふらるるにあらはれし朝寄

なごのけいさつより巻紙の類にふり

表の世よりあらはれし朝寄

院御本六月度申前合のうら

かりきいふにあらはれし朝寄

朝寄申すにあらはれし朝寄

なごのけいさつより巻紙の類にふり

二陳申時よりあらはれし朝寄

延徳よりあらはれし朝寄

りたるにあらはれし朝寄

ありふらるるにあらはれし朝寄

乙一

兵衛海

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

乙一

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

乙一

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

乙一

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

あまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでにあまのついでに

日吉御皇親感平素人の方信りし時

百とせし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

大所一十八夜

さしせし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

戀

建仁二年六月水鏡殿の法皇御人より御

てあはれし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

られし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

初恋

さしせし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

初恋

さしせし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

初恋

さしせし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

同年九月十三夜水鏡殿の法皇御人より御

初恋

さしせし方とせしめあはれ存松の御心よりあはれ

初恋

那公字のしるしを記すに
~~~~~

秋意

~~~~~

冬意

~~~~~  
新古  
~~~~~

晴意

~~~~~

暮意

~~~~~

霜中意

~~~~~

山家意

~~~~~

古意

~~~~~

松石意

~~~~~

閑路意

いづれのいづれ海高敷よりいづれも風を

海邊戀

別れのこころをいづれもいづれもいづれも

河を渡る

いづれもいづれもいづれもいづれも

舟雨恋

いづれもいづれもいづれもいづれも

舟風恋

いづれもいづれもいづれもいづれも

建久の年夏た大将家開合恋

三馮江

いづれもいづれもいづれもいづれも

建仁元年二月書開合

遇不會恋

いづれもいづれもいづれもいづれも

正治二年二月た大将家開合

夏恋

いづれもいづれもいづれもいづれも

いづれも

定所津奉 疾急之入之月

の金一の日の事とて思はるる事

建仁二年二月廿二日

生のじ由の本はら月とらるるの事

兼久二年 同月廿日 和昇所

會不違忌

ふ余一もたあふ日とて思はるる事

和久二年 九月 栗田宮昇合

昇日忌

厚らあふ事とて思はるる事

二言十の事

病ありとて思はるる事

上りて思はるる事

下りて思はるる事

建保五年 二月 庚申

久慈

新古 事とて思はるる事

建保五年 七月 和久所

私私古
意不
不見

被忘忘

しるしをいふにふらふらとていふに
建曆二年二月内裏より

御しつゝあつたはらへりてあつたはらへりて
御のしつゝあつたはらへりてあつたはらへりて
新しきあつたはらへりてあつたはらへりて

建曆二年九月十三夜内裏より

按名忘

あつたはらへりてあつたはらへりてあつたはらへりて

建保二年同月内裏より

あつたはらへりてあつたはらへりてあつたはらへりて
あつたはらへりてあつたはらへりてあつたはらへりて
あつたはらへりてあつたはらへりてあつたはらへりて

九月十三夜内裏

寄海忘

あつたはらへりてあつたはらへりてあつたはらへりて
建保四年内裏

寄草忘

あつたはらへりてあつたはらへりてあつたはらへりて

中納言長方郷之丞久松

純久之丞

建久五年二月九日

建久五年二月九日

建久五年二月九日

建久五年二月九日

純久之丞

建久五年二月九日

純久之丞

建久五年二月九日

建久五年二月九日

純久之丞

建久五年二月九日

純久之丞

建久五年二月九日

純久之丞

建久五年二月九日

純久之丞

いふはかたの心も世も人の心も
降遠路恋

あはれなる月もあはれなる心も
暮山恋

推大納言

空野のこころの秋も秋も
貞永元々七月大慶寺合

恋十巻

弄衣恋

わがこころもあはれなる心も
弄鏡恋

弄鏡恋

あはれなる心もあはれなる心も

弄衣恋

あはれなる心もあはれなる心も

弄衣恋

あはれなる心もあはれなる心も

弄衣恋

あはれなる心もあはれなる心も

弄衣恋

あはれなる心もあはれなる心も

芳徳之巻

夏に於ては... 芳徳之巻

芳舟之巻

日神の神... 芳舟之巻

人... 芳舟之巻

續右
... 芳舟之巻

... 芳舟之巻

今更に
 此の如く
 是れは
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

又
 後右
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

田の精進の事一〇〇の御いひの事と申す

也

かゝる御いひの事と申すは精進の事と申す

精進の事と申すは精進の事と申す

事と申すは精進の事と申す

いふ事と申すは精進の事と申す

いふ事と申すは精進の事と申す

也

いふ事と申すは精進の事と申す

いふ事と申すは精進の事と申す

いふ事と申すは精進の事と申す

也

いふ事と申すは精進の事と申す

也

いふ事と申すは精進の事と申す

也

いふ事と申すは精進の事と申す

いふ事と申すは精進の事と申す

伊豫乃和使の清光小鈴康忠開ある
 一平の事なる事ありて
 是れ十段の事なる事ありて

雜
 檢

伊豫乃和使の清光小鈴康忠開ある
 一平の事なる事ありて
 是れ十段の事なる事ありて

伊豫乃和使の清光小鈴康忠開ある
 一平の事なる事ありて
 是れ十段の事なる事ありて

定唐詩集一

秋振

秋夜の月の清き光を照らす月影の光を照らす

建曆三年八月内裏御合

山晴月

原野の月影の光を照らす月影の光を照らす

河相霧

朝霧の光を照らす霧の光を照らす

建仁三年秋和歌所御合

霧中暮

霧の中を歩く人の影を照らす霧の中を歩く

山家松

山家の松の影を照らす山家の松の影を照らす

正徳元年九月御合

雨軒中晩嵐

雨の軒の中を歩く人の影を照らす雨の軒の中を歩く

同二年二月同家御合

秋振

日
意のこころをいかにせんか
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

建仁二年二月廿二日

日
神宗天皇の御代に
ついでに
ついでに
ついでに

建永元年三月廿二日

暮山

日
後醍醐天皇の御代に
ついでに
ついでに
ついでに

建保元年八月廿二日

暮山

日
建保元年八月廿二日
ついでに
ついでに
ついでに

接政殿詩方合

霧中眺望

秋の日はすまじき
ついでに
ついでに
ついでに

昔の日はすまじき
ついでに
ついでに
ついでに

建仁元年三月八日

接宿嵐

有るべき時をいかにせんか
ついでに
ついでに
ついでに

母の行ひはあはれ
ついでに
ついでに
ついでに

のありて申書
ついでに
ついでに
ついでに

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

金通殿にのたまはるる言はれぬる事あり朝

はるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

はるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

サるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

とてしむるはるる言はれぬる事あり朝

後田村

君の御見事なまの日の村の昔はたすけの事

建永元年穰和方不本接ふ

我が心よとてはたの村の月を照らするに

思はくは病のすけはたのまよ表とてのこ

水元二年少将具親相は八幡と梅

うし申さる徳をさるる

日神の唐の早の村の月を照らするに

村角小徳のまの村の月を照らするに

同元年九月軍國交拜令 于時辭職

弄海朝

多たやまはたの村の月を照らするに

弄山暮

男の山文書の村の月を照らするに

たの山文書の村の月を照らするに

たの山文書の村の月を照らするに

後田村号

おのれは神代書に記す所の神代文を
神代文の神代書に記す所の神代文を

年より神代書に記す所の神代文を

美之國年内より記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

為文之原志するまに記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文

神代文の神代書に記す所の神代文を

神代文の神代書に記す所の神代文を

ふたりのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび
あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび
あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび
あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび

あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび
あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび
あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび
あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび	あそびのあそび

反歌

春のあけぼののうららかにあけぼののうららかに

建保九年四月廿三日

春の朝

春のあけぼののうららかにあけぼののうららかに

春の朝

春のあけぼののうららかにあけぼののうららかに

建保九年四月廿三日

春の朝

春のあけぼののうららかにあけぼののうららかに

春の朝

春のあけぼののうららかにあけぼののうららかに

春の朝

春のあけぼののうららかにあけぼののうららかに

春の朝

春のあけぼののうららかにあけぼののうららかに

春の朝

二首

五月

はるあけみくをいふにうらむ我の心もあはれ
野印柳

みらの心もあはれ柳をいふにうらむ我の心もあはれ

同年九月十三夜花大信の書

あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ

あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ

あ

あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ
あはれをいふにうらむ我の心もあはれ

Handwritten cursive text, first line on the left page.

Handwritten cursive text, second line on the left page.

Handwritten cursive text, third line on the left page.

Handwritten cursive text, fourth line on the left page.

Handwritten cursive text, fifth line on the left page.

Handwritten cursive text, sixth line on the left page.

Handwritten cursive text, seventh line on the left page.

Handwritten cursive text, eighth line on the left page.

Handwritten cursive text, ninth line on the left page.

Handwritten cursive text, first line on the right page.

Handwritten cursive text, second line on the right page.

Handwritten cursive text, third line on the right page.

Handwritten cursive text, fourth line on the right page.

Handwritten cursive text, fifth line on the right page.

Handwritten cursive text, sixth line on the right page.

Handwritten cursive text, seventh line on the right page.

Handwritten cursive text, eighth line on the right page.

Handwritten cursive text, ninth line on the right page.

同平青月ふあうて二信を奉行

ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん

あし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

秋野ふん一日の事すうらうてふんふん

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

日書日一日の事すうらうてふんふん

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあしあしあしあし

たゞの事なればとて
中世の世に於ては
その世に於ては

湯丸

昔の世に於ては
下なる神として
我々の世に於ては
友の世に於ては
田の世に於ては

我々の世に於ては
昔の世に於ては
今世の世に於ては
中世の世に於ては
その世に於ては

その世に於ては

西一

その世に於ては

建武元年二月十日
建武元年二月十日

一

建武元年二月十日
建武元年二月十日

建武元年二月十日
建武元年二月十日

一

建武元年二月十日
建武元年二月十日

建武元年二月十日

か — 通信状

昔の友をよみてやうきと云ふは
 右様殿へうきと云ふは
 りつと云ふは
 はたし

昔の友をよみてやうきと云ふは
 右様殿へうきと云ふは

昔の友をよみてやうきと云ふは
 右様殿へうきと云ふは

昔の友をよみてやうきと云ふは
 右様殿へうきと云ふは
 りつと云ふは
 はたし

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is dense and fills most of the page.

81

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is dense and fills most of the page.

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

也

Handwritten cursive text, first line.

也

Handwritten cursive text, second line.

也

Handwritten cursive text, third line.

也

也

Main body of handwritten cursive text on the right page.

花の多しをいふは... 神の徳をいふは

すまひのむねのまゝなり... 神祇

神祇

後京拾遺及殿侍傳河内守... 神祇

平家物語... 神祇

ひしは... 神祇

社類述懐

今このころ... 社類述懐

住吉并依羅社... 社類述懐

... 社類述懐

仁吉のね... 社類述懐

... 社類述懐

... 社類述懐

... 社類述懐

仁吉

仁吉の... 社類述懐

... 社類述懐

ちまの紅葉の文一徳のて唐の并よぬ木
拓

本定とく人編とくは

遠近落葉

昔送みたるふりてしむ一葉のこゝろをあら木

春国行波

徳今を我座もあら思方たのの可段のしを

みらひのふたあて

山路月

神の影にわたりてる花のうらなむかひの月
景

晴初音

そとをきこひてのうらみとてあはれはるる
の影を

深山紅葉

みらむ紅葉のふりてる花のうらなむかひの月
結音

海邊夕月

今をきこひてのうらみとてあはれはるる
の月

河邊落葉

深林と音のけりてる花のうらなむかひの月
結音

搖宿夕月

若原のひまにうらなほのあやむけのあやむけの月
雲中敷

その目あしむけのうらなほのあやむけのあやむけの月
久神集

神々のあやむけのあやむけのあやむけのあやむけの月

釋教

後法住寺入道用日殿舍利師詩集結縁
あつるうらなほのあやむけのあやむけのあやむけの月

如是相

後法住寺入道用日殿舍利師詩集結縁

性

ふるさとのあやむけのあやむけのあやむけのあやむけの月

躰

ふるさとのあやむけのあやむけのあやむけのあやむけの月

力

ふるさとのあやむけのあやむけのあやむけのあやむけの月

作

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

こゝ因

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

こゝ縁

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

こゝ果

神のまはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

こゝ報

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

本末究竟等

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

一も一も一も

化機妙品

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

報恩會五百弟子

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

同會ノ託

まはらひのしるしをいふにまはらひのしるしをいふに

此の如きもの多し其の如くは

律師 獻回より一法集行

普賢 永二年

先風の如くは自らして一法集行

田乃周忌一法集行の如くは書多し

是の法集行の一部の表紙小繪の如く

一巻

一巻

此の如きもの多し其の如くは

二巻

行の如くは自らして一法集行

三巻

此の如きもの多し其の如くは

四巻

此の如きもの多し其の如くは

五巻

此の如きもの多し其の如くは

六巻

公何可採藥入道

此書乃由公何採藥入道之遺稿也
抄入
監

此書乃由公何採藥入道之遺稿也
抄入
監



